

指標名: ベッド転落発生率

背景

小児科病棟は0歳から15歳までの子どもが入院している。幼児期の子どもは体に比して頭が大きい
ため、体の重心が上にあり転びやすく、柵から頭が出ていたら落ちる危険性が高い。また、危険認知も未
発達で大人が予期しない行動をとることもある。そのため、付き添い者が側にいても柵を下げた状態で
少し目を離した隙に、付き添い者を追い、ベッドから転落した事例がある。転落により検査、治療の延
期、入院目的とは別の治療が発生しないようにするためにも付き添い者と協力しながら、予測できるリス
クに対して早期に対応して行く必要がある。

データの定義

分子: ベッド転落件数

分母: 小児科病棟入院患者の延べ日数

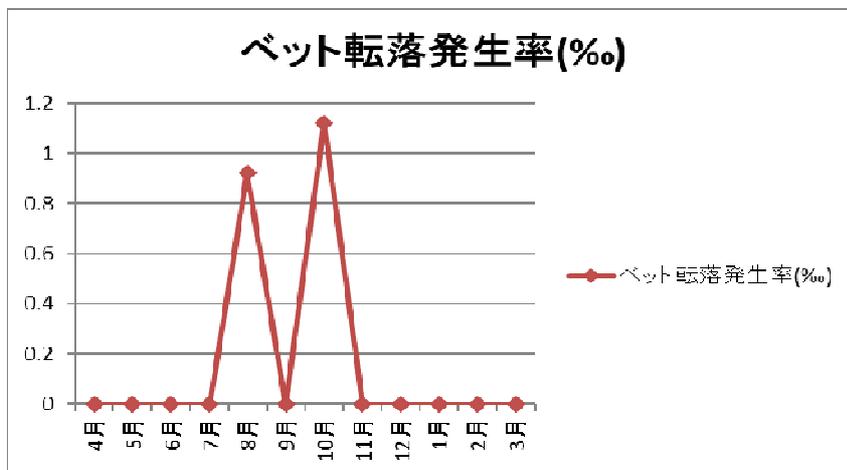
2018年度のデータ

2018年度 C7病棟 ベッド転落インディケーター集計

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総患者数	945	1004	963	983	1079	941	892	821	866	893	870	1067
発生件数	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
発生率	0	0	0	0	0.92	0	1.12	0	0	0	0	0

ベッド転落発生率0.21% 発生件数2件 (2018年4月～2019年3月)

計算式 発生件数 ÷ 総患者数 × 1000



参考データ

2017年度 C7病棟 ベッド転落インディケーター集計

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総患者数	827	823	864	954	975	863	911	930	994	713	762	969
発生件数	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
発生率	1.2	0	0	0	0	1.15	1.09	0	0	0	0	0

ベッド転落発生率0.3% 発生件数3件 (2017年4月～3月)

評価

今年度のベッド転落は2件、0.21%の発生率であり昨年度より減少した。

8月に発生した1件は、病状回復し児の活力が出てきた退院間際に、付き添い者の気のゆるみもありベッド転落発生している。10月に発生した1件は、鎮静剤を使用した検査後にふらつきが残る中ベッド上で歩行し、柵が挙っておらず転落している。検査帰室時は入眠していたため、帰室後に処置を行った医師、家族ともに柵が挙上していないことへ注意が向いていなかった。

看護計画書に病状回復期や鎮静剤使用後は特に注意が必要であることの一文を加えた入院時からの呼び掛け、また家族に説明することでスタッフ自身も意識できるようにした。昨年度と同様に2件とも転落事例をボードに掲示した。日々の転落未発生日数の放送や掲示、看護計画書で説明することで転落予防に対する看護師の意識は強くなっているが、今後は医師が採血や処置に入った際の柵の挙上忘れもないよう医師への注意喚起も徹底していく必要がある。

参考文献

1) サークルベッドを使用する小児用の転倒・転落リスクアセスメントツール:C-FRAT 第2版および第3版の妥当性の検証 藤田優一,二星淳吾,藤原千恵子 P125-134 18巻2号 2014年